乳幼児の非言語的行動の発達に及ぼす保育要因の効果に関する神経心理学的研究

利　島　　保（広島大学教育学部心理学科）

母子相互作用は，母子のそれぞれが出力する種々の行動的サインの交信過程である。この交信過程の基礎には，行動的サインの認知的照合過程が働いている。この過程が母子に定着するのは，子ども側の認知的発達と母親の側の情報処理様相の可塑的対応が必要である。

この観点に立って，母子相互作用の交信過程の初期から存在していると考えられる非言語的行動の出力過程の発達的変化，そのような出力情報の処理機構の発達について神経心理学的に検討することを目的に，本研究は計画された。特に，非言語的行動サインが母子相互作用の基礎として，乳幼児の側において機能するためには，母親からの言語的，非言語的サインを感覚的に入力し，それらに対応した出力としての非言語行動に至る神経心理学的情報処理過程の発達が重要な役割を果す。また，この発達が正常であるか否かを予見できるとすれば，母子相互作用のあり方とその予後を評価する上で有力な手掛りとなる。そこで，乳幼児及び自閉症児を対象に彼らの非言語的行動の発達を神経心理学的に検討するために，以下の計画を3年間にわたり実施していきたいと考えている。

初年度は，コミュニケーションの目的で種々の行動的サインを使用することに欠けている自閉症児が，指示事態で示す情報処理能力の諸相について神経心理学的検討をする。この研究では，認知機能に障害を持ち，極めて悪い言語コミュニケーション状態を示す自閉症児が，言葉による指示を与えられた時，それに従って示す非言語的行動は，何を手掛りに処理され出力されたものであるか，また，指示行動以外に指示者や周囲の人に示すその他の非言語行動の機能について実験的検討を加える。

第2年度は，健常なる3～6歳児を対象として，自閉症児群に課したと同様指示事態における行動について，初年度と同様な観点から分析を行ない認認的障害の状態と認知発達の水準とを対応づけて，コミュニケーション手段としての行動的サインの発達心理学的特徴を明らかにする。

最終年度には，乳児とその母親の相互作用事態で，行動的，生理的反応の周期性測定をマイクロコンピュータによって計測し，母親と乳児の非言語的応答の様相及びレパートリーを特定し，乳児から年長児に至る非言語的行動の神経心理学的発達機制に及ぼす母子相互作用効果，障害児の非言語的行動の欠陥の診断基準について検討する。

以上，3年間の研究成果から，母子相互作用が過程で成長してくる非言語的コミュにケーション行動の意義について考察する。

昭和58年度研究報告

自閉症児の自閉症状が言語を含めた認知機能全般にわたる情報処理機能障害と考え，他者からの働きかけとしての音声言語に対する理解の反応が行動の形を取って現われる事態において，自閉症児が指示的音声の音声的，非音声的要素のどのような側面に反応するかを明らかにすることを目的として，自閉症児の指示的音声に対する非言語的行動にみられる他者との相互作用の検討を行なった。

自閉症児20名に対し，2種の異なる行動を指示する音声を，彼らが別の課題遂行をしている時に与えた時の，指示に対する直接的行動，その場にいる他者への非言語的行動を，1名づつVTR録画し，その記録に基づいて整理した。音声は験児の知っている人の音，知らない人の音，人工音声の3種で，これらは他人がいる条件といない条件のそれぞれで実施された。その結果，人工音声に対する正反応は極端に悪く，非言語的行動としての視線移動は，音源定位としてのみ機能しているが，人の存在を考慮したコミュニケーション的様相は示されなかった。

今後は，健常幼児に同様な事態でテストを行ない，相互作用の認知発達的側面を検討するため，実験を進行中である。